平成 28 年 7 月 29 日

三菱地所レジデンス株式会社
代表取締役　社長
小野真路　殿

一般社団法人　日本建築学会近畿支部
支部長　門内輝行

旧三菱銀行神戸支店の建物の保存活用に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、神戸市中央区相生町 1 丁目 1-21 に位置いたします旧三菱銀行神戸支店（旧ファミリア・ホール）の建物について、マンション開発のために解体を計画しておられること、新聞等の報道により聞き及んでおります。

当該建物は、1900（明治 33）年に建設されたもので、設計者は我が国最初期の建築家の一人であり、建築学会（現・日本建築学会）会長も務めた建築家曽禰達蔵（1852-1937）です。その建築の有する価値は、別紙「見解」に記されたとおり、我が国の近代建築として極めて高いものであり、また神戸の中心地にあって長く市民にも親しまれてきたかけがえなきものであります。

本会では以前より我が国近代建築の調査研究を行い、その成果を『日本近代建築総覧』にまとめ、1980 年（昭和 55）に刊行しております。その中で、当該建物は価値高い近代建築として記されておりますことはご高承のことと存じます。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。またその際、オリジナルの建物の価値を損ねないような細心の注意を払ったデザインや技術が必要になります。

貴社におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の歴史的な価値を保つための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 28 年 7 月 29 日

旧三菱銀行神戸支店の建物についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 笠原一人

1. 建築の概要

1-1. 建設経緯

1893（明治 26）年に三菱合資会社が発足し、1895（明治 28）年に神戸支店が設立される。当建築はその社屋として建設されたものである。なお神戸は、明治 3（1870）年に岩崎弥太郎が興した九十九商会以来、三菱の事業拠点であった。

1895 年の支店開設時の社屋は栄町 5 丁目の元回漕店の店舗を用いたと伝える。当社屋の建設は 1897（明治 30）年 4 月に着工し、1900（明治 33）年 10 月に竣工した。次項で述べるように、三菱合資会社銀行部の使用を主な目的として建設され、1919（大正 8）年 8 月の三菱銀行発足に伴い、同行神戸支店となる。1945（昭和 20）年 2 月に神戸西支店と改称する。1973 年 5 月に三宮支店が神戸支店となるに伴い、廃止された。1977 年に子供服メーカーのファミリアが取得し、「ファミリア・ホール」として長く用いてきた。2016 年に三菱地所レジデンスの所有となった。

1-2. 施設内容と変遷

当建築は 1900 年の竣工時に、外壁を花崗岩による石貼りとした煉瓦造、地上 3 階建てとして竣工した。建物の平面外形は当初、北東を正面とする横長の長方形をなし、南側に 1 ベイ分、突出した平面となっていた。建築面積は約 270 坪であった。屋根は寄棟でスレート葺きとした。

北東側正面中央に主玄関を開き、南東側側面に脇玄関、北西側側面に通用口を開く。正面玄関を含む北西側の過半は銀行に充てられ、南東側の 1 ベイ×4 ベイは別業務の事務所を想定していた。銀行部分は正面玄関を入った奥に 2 層吹き抜けの営業室を置き、周囲に応接室、待合室、執務室、金庫室、階段 2 個所を配する。事務所部分は脇玄関の左手に階段室を置き、執務室 2 室を配した。

1932（昭和 7）年から増築工事がおこなわれ、1933（昭和 8）年 7 月に竣工した。そこでは背面側に建築面積約 100 坪拡張し、あわせて営業室も単層から 2 層吹抜へ改修された。そしておそらくこの時に小屋裏に鉄筋コンクリートの梁を架け、営業室を囲む煉瓦壁体に鉄筋コンクリート壁を打ち増しする工事がおこなわれた。その他、数か所にわたって補強のための壁が増設され、内装仕上げ材についても一部変更されている。増築工事の設計は三菱地所部営繕課が担当した。

1945 年の神戸空襲で被災し、損傷したペディメントを除去し、これに伴ってコーニスの材と形状も改められている。1995 年の阪神淡路大震災でも被災し、3 階部分、小屋裏などにクラックが目立つ。しかしながら、外観、内部ともに明治期に建設された当初の姿も十分に残されており、現在も竣工当時の建物の価値をよく留めている。

当建築は、1980 年に日本建築学会から発行された『日本近代建築総覧』に記載され、日本における優れた近代建築として早くから評価されている。

1-3. 設計者

設計者は曽禰達蔵である。曽禰は 1852（嘉永 5）年 11 月 24 日に唐津藩士の子として江戸藩邸に生まれ、1868（慶応 4）年の江戸開城に際しては彰義隊に参加するなどしたのち、1873（明治 6）年、工学寮造家学科に第 1 期生として入学し、1879（明治 12）年に卒業する。工部大学校助教授、海軍技師をへて、1890（明治 23）年、三菱に入社。三菱社大阪支店（1891 年竣工）の設計をおこなったのち、東京丸ノ内の三菱 1 号館（1894 年竣工）・2 号館（1895 年竣工）・3 号館（1896 年竣工）建設に参加し、建築顧問のジョサイア・コンドルを助けて監理あるいは共同設計に従事する。

当三菱合資神戸支店建設に際しては神戸に移住して設計に当たった。なお、当建築の設計においては、基礎と立面に関してジョサイア・コンドルの提案を得ている。曽禰は当建築の設計と並行して三菱合資会社兵庫出張所（1899 年竣工）の設計も担当する。東京に戻ったのちに手がけた建築のうち、三菱長崎造船所占勝閣（1904 年竣工）、東京倉庫兵庫出張所（1905 年竣工）は現存する。

曽禰は 1906（明治 39）年に三菱を定年退職し、1908（明治 41）年に中條精一郎とともに曽禰中條建築事務所を開設する。曽禰中條事務所は慶応大学図書館（1912 年竣工・国重要文化財）、東京海上ビル（1918 年竣工）、如水会館（1919 年竣工）、日本郵船ビル（1923 年竣工）、三井銀行小樽支店（1927 年竣工）、三井銀行大阪支店（1936 年竣工）などの秀作を数多く設計し、戦前期最良の設計事務所と評されている。曽禰達蔵はまた 1918 年から 21 年まで建築学会長を務める。長く建築界に貢献したが、1937 年 12 月 6 日に満 85 才で世を去った。

2. 建築史学上の価値

2-1. 歴史的価値

まず、当建物は、日本人建築家の設計による本格的な建築の遺構として早いものである。ここで「本格的」というのは、大規模な煉瓦造建築で、様式規範に則った装飾を有する建築である。当建築に先行する遺構としては、日本銀行本店（辰野金吾設計／1896 年竣工）、奈良帝室博物館（片山東熊設計／1894 年竣工）および京都帝室博物館（片山東熊設計／1895 年竣工）ぐらいである。失われた建築を含めても、関西では明治生命大阪支店（野口孫市設計／1899 年竣工）、日本火災保険大阪支店（山口半六設計／1900 年竣工）、大阪控訴院（河

合浩蔵設計／1900 年竣工）が加わる程度である。大阪停車場（吉井茂則設計）は 1899 年竣工と記されることもあるが 1901 年の竣工である。特に神戸においては、こののちの兵庫県庁舎（山口半六設計／1902 年竣工）、神戸地方裁判所（河合浩蔵設計／1904 年竣工）などの大作の先蹤をなすものとして重要である。

同時に当建築は曽禰達蔵の単独作品として貴重である。曽禰は辰野金吾・片山東熊と並んで、日本で最初に西洋建築を体系的に学んだ人物である。彼の作品は、曽禰中條事務所としてのものは多く保存されているが、三菱時代の作品は先述の占勝閣と東京倉庫兵庫出張所しか残っていない。そのうち、当建築は最も工費を注ぎ、規模も大きなものであり、いわば日本人建築家の初心をよく伝えるものといえる。

2-2. デザイン的価値

当建築は、1945 年の空襲により屋根が失われ、戦後改変されてしまっているものの、屋根部と 2、3 階の中間層、そして 1 階の基壇という三層で構成され、円柱やピラスター（付け柱）、半円アーチなどを備えた、いわゆるルネサンス様式に基づくものである。これは、様式建築の中でも最も正当な様式であり、信用や格式を重んじる当時の銀行建築の多くが採用した様式である。その中でも当建築は、デザイン的な密度が高くプロポーションもよく、重厚さを備えるなど、とりわけ格式の高さを誇るものとなっている。

また同時期の煉瓦造の様式建築は赤煉瓦を剥き出しにしたものが多かった中で、外壁を石張りとするものは、日本銀行本店と当建築ぐらいである。竣工当時の『建築雑誌』の報告で、特筆すべき点の筆頭に「すべての立面がぜいたくに花崗岩で仕上げられていること」を挙げ、さらに「最も目立つ特徴」として「2 階の大きな装飾された窓とペディメントを戴く 4 本のコリント式オーダー」を挙げるのは、当建築が日銀本店並みの卓越した意匠を備えていることを十分に認識していたからだといえよう。時代の水準を越えたデザインが軒廻り以外は完全に残っていることの重要性はどれほど強調しても足りない。

室内においても、エントランス・ホールと営業室との境をなすセルリアーナと呼ばれる形式の石造の円柱やアーチ、木製や金属製の天井、木製の建具、階段の手摺、床のタイルなどに様式的なデザインが認められ、低層階を中心に 1900 年竣工時のものが残されている。いずれのデザインも密度が高くプロポーションがよい。

2-2. 地域遺産としての価値

かつて当建築の近隣には数多くの優れた近代建築が建っていた。当時我が国最大規模を誇った総合商社である鈴木商店の本店建物や三越百貨店神戸支店（横河工務所設計／1926 年竣工）は、当建築に近接して建っていた。また近隣には、東海道本線の終着駅として開業した神戸駅（初代：1874 年竣工・第 3 代（現在）：1930 年竣工）や神戸地方裁判所（河合浩蔵設計／1904 年竣工）、神戸市庁舎（初代：1889 年竣工・第 2 代：秋吉金徳設計／1909 年竣工）、第一銀行神戸支店（辰野金吾設計／1908 年竣工）などが建っていた。いずれも神

戸のみならず我が国を代表する優れた近代建築である。

戦後に至って神戸の中心地は三宮に移るが、戦前期にあっては、当建築は人口規模で東京、大阪に次ぐ全国3位を誇った神戸の中心地に建っていた。1995年の阪神大震災を経て戦前期の近代建築が急速に失われるが、当建築は往時の神戸を象徴するものとして、長らく市民に親しまれてきた。地域の歴史を記憶にとどめる地域遺産としても極めて高い価値を持つ。

3. 期待される活用

ここまで述べたように、当建築は日本人が西洋建築の様式と工法とを咀嚼できるようになった時期の記念碑的作品である。竣工報告では、コリント式の円柱などの外観は「道行く人々を十分に引きつける」と述べているが、充実した細部意匠は今日においても魅力的である。この建築を失うようなことがあれば、神戸の街にとって実に大きな損失といわなければならない。

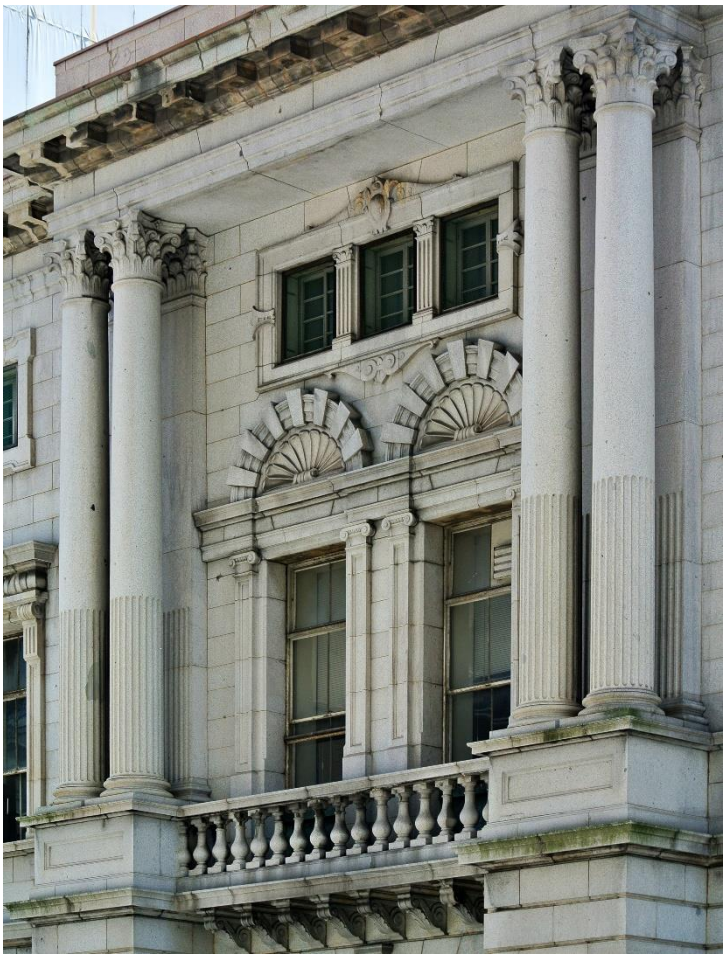
当建築のような明治期の煉瓦造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の傾向となっている。横浜の赤レンガ倉庫（大蔵省臨時建築部設計／1911年竣工）は、2002年に改修を終えて商業施設として活用されて賑わっている。東京駅（辰野金吾設計／1914年竣工）も、2012年に免震化し復元および改修を終えて活用されており、大阪の中央公会堂（辰野金吾設計／1918年竣工）は、2002年に免震化し改修を終えて活用されている。また当建築と同じく曽禰達蔵の設計による神戸の旧日本郵船神戸支店（1918年竣工）は、1994年に改修されて商業施設として活用されており、阪神大震災にも耐えた。このように各地で、戦前期に建てられた煉瓦造の建築についての保存活用の成功例が増えている。十分な歴史的価値を有する当建築についても、その価値を活かしながら保存活用することが望まれる。

当建築については、マンション開発のため解体し、一部の壁面を再現する計画であると仄聞しているが、歴史的価値を持つ貴重な建築物については、壁面だけが重要であるわけではない。内部空間まで含めて保存活用されるべきである。しかも当建築については、内部空間も1900年竣工のオリジナルが残されている。1932年の増築部分もまた、すでに十分に歴史的な価値を持ち、当時の改修のあり方を示すものとしても価値がある。

保存活用に際しては、オリジナルの建物の歴史的、文化財的価値を可能な限り損ねず、それらを十分生かした上での活用が図られることを期待するものである。よって多角的なご検討と叡慮により、当該建物の保存と活用が計られるよう切望するものである。

【旧三菱銀行神戸支店】

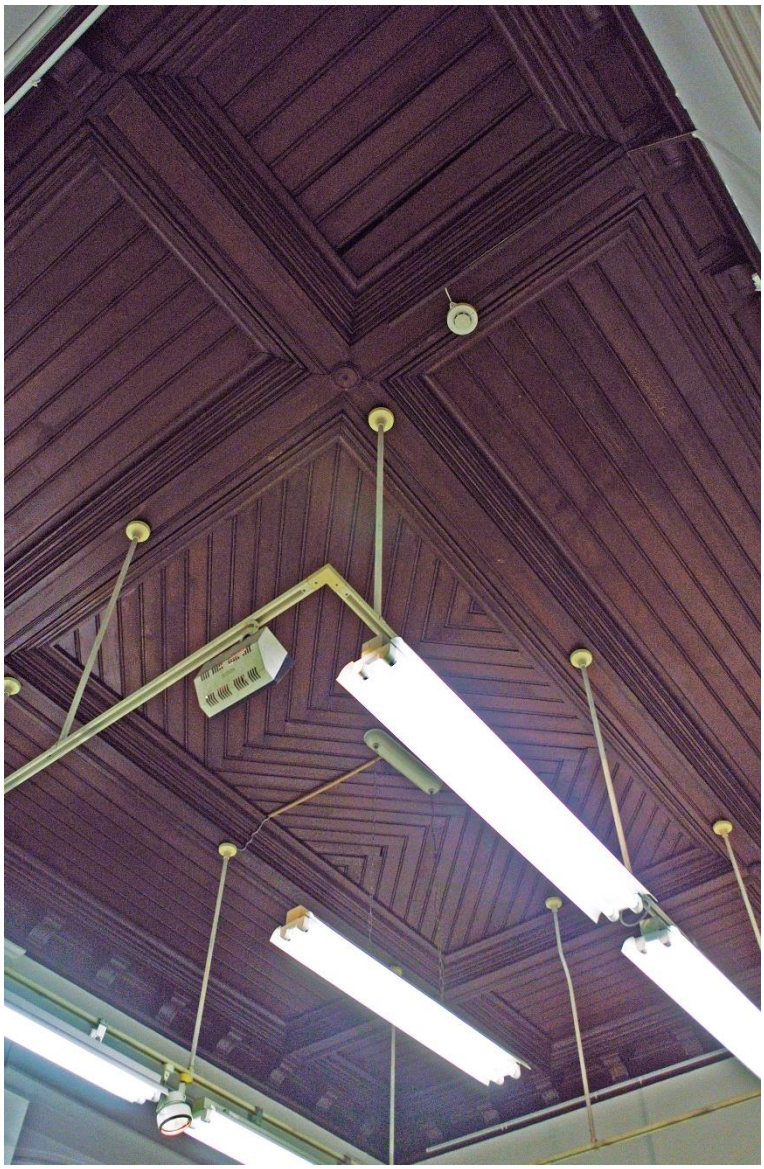
1　外　観（撮影．石田潤一郎）



2　正面コロネード詳細（撮影．石田潤一郎）

3　エントランスホール（撮影．石田潤一郎）

4　営　業　室（撮影．石田潤一郎）



5　執務室天井（撮影．石田潤一郎）